

## 02店の看板(pp.101-104)

ハンダオ通りが動物の通りであると認識している人は多くいる。そこで、サーカス団を作るのに十分な数だ。まず最初に、金色の水牛の看板の店があり、次に、やはり金色の鐘の店が目に入る。この二つの看板は、ホン・ミン・ホン（注1）の伝説の物語を現している。そして金色の牛、金色の鯉（鯉が竜に化すのがより正しく、この鯉は反対にハンガン通りへ行ってしまった）、ラクダはここで何をするのはわからない、雄鶏（もちろん金鶏）、鹿、キリン、鳳（凰）、亀（金亀）、この亀は山に戻ってしまった、笠をかぶったアヒル、象（この象も森に帰った）、そしてサイ。幾星霜を重ね、それぞれの店は動物の名前を使いつくした。そして私たちは、ハンダオ通りの看板には、どう猛な動物が使われていないと認めざるをえない。サイはどう猛な動物ではあるが、ハンダオ通りのサイはとてもおとなしく、決して噛み付いたりはしない。そして黄色い虎とか獅子とかいった猛獣もいない。ここにいる動物たちが、聖獣かおとなしい動物のどちらかであるために、顧客の信頼を得ることができるだろうか。水牛、鹿、牛...、これらが誰かに危害を加えたりすることが、今まであったのだろうか。水牛や鹿の店に入って布や絹を買っても、きっとふっかけられることはないだろうし、店にはこやかに、そしてきめ細やかに対応してくれるだろう（もっともベトナムの店の女性は、ひやかすだけで買わない客や買い叩こうとする客のあしらいは心得ている）。そして、もし牛のようにほおっておかれたとしても、金色の牛は滅多にいないものだと思えられるだろう。

私がどうしても理解できないのは、なぜ、この群れにラクダがいるのかということだ。まるでこの一頭だけが、ここにまぎれ込んだようだ。他の動物と決してなじむことはない。西洋人は人を虚仮こけにするとき「このラクダ...」と言うではないか。その意味では、ラクダが指すのは店なのか、商品を買う客の意味なのか。

さらに問わなければならないのは、なぜか他の動物が看板に使用されていないことや、彼らの縄張りがハンダオ通りにだけであることだ。ハンガン通りやホアンキエム湖岸（ポーホー）に行っても、動物はついで見かけない（魚がハンガン通りに上って竜になったのは、天の摂理に逆らっている）。

ある人が私に語ってくれたところによると、それは店がしのぎを削った結果だそうだ。元々のハンダオ通りは狭くて、通りの両側の家々はあまり離れていなかった。ある時偶然に、2

つのおおたな大店が鹿の看板を掲げる気になった。2匹の看板は、一時いっしょに掛けられていた。2軒の店を間ち違えた混乱がたびたび生じたが、双方が意地を張って、がんとして看板を変えなかった。そうして1年が過ぎた。突然一方の店主が、看板を豹にし、放言して曰く、「2、3日もすれば、豹が鹿を食い殺しますよ」。片方の店主も怒って、虎の看板を持って来て、言い返した。先の店主も負けじとばかりに、すぐさま豹からライオンに変えた。片方の店主も直ちに象に変えた。

象が出て来てはたまらない、象より頑丈な動物はいないのだから。象はすべての動物の先頭に立つものだ。もっと大きな象を持ってくるしかない。そうして大きな象を造って、片方も負けじと更に大きな象を掲げる。そうして2頭の象は競って大きくなり続けた。通りは狭かったから、ある日2頭の象は、鼻を突き合わせて、道を塞いでしまった。

事は裁判になった。役人は象を両方小さくさせ、今後はおとなしい動物（たとえば象）しか看板には使ってはならぬと命じた。豹、虎、熊、猫などのどう猛な動物の使用は禁じられた。

話は以上だ。真偽の程は定かではないが、なぜ猛獣が使用されないかの説明はつく（だがサイはどうだろう）。一方で、なぜ動物の看板がハンダオ通りにしかなくて、ハンガン通りに上っても、ホアンキエム湖岸（ポーホー）に下ってもないのかという疑問には、何一つ答えてはいない。

注1 金の水牛の伝説 Sự Tích Trâu Vàng

13世紀リ朝の時代、医師である僧ホンロ（sur Không Lộ）が中国の高官の病気を治し、ハノイに帰って鐘を作って鳴らすと、中国から金の水牛や財宝がハノイに吸い寄せられてきたという伝説。

注2 初出誌は文頭に“Việc”